RUBBISH Selecting Squad's erotica 03
RE03
FOR ADULT ONLY

RE03

■前書き■

始めまして、またはお久しぶりです、無望菜志です。
久しいと言ってもこの前RE02出したばかりですが（苦笑

さて性懲りも涼くまた触手です。
好きだからしょうないデス（汗
大体ホロウでセイバーさんがタコ嫌いなんて話、
アレはもう触手モノを描けというネタ振り以外の
何物でもな無いと思うのです。
描かざるをえなかったのです。
電波がッ、月とか前糸の国とかそういうとこから
電波が送られてくるんだよッ描けって言うんだよッ！

そんなわけで
タコ × セイバーさんとなりました。

さて今回もゲスト原稿として小説を載せております。
ゲストというかサークルメンバーの琴月氏にケツバット
かまして無理矢理書かせましたが、そのせいか
方向性がかみ合わないラビューンなSSと
なっております。
彼なりの抵抗と言ったところでしょう（笑

そんな若干チグハグな内容となっておりますが、
最後までお付き合い頂けたら幸いです。

2006年8月某日
RUBBISH遊撃隊　無望菜志

メイドさんはロンスカ。
それを強く強く主張します。
そんな穴埋めセイバーさん。

……なんと言うことだ。
あの斬っても斬っても
果てなかった異界の邪神を

私は口にしていた
というのか……！

……異界の生物一匹に兵は全滅…

騎士王と呼ばれた私まで

この有様とは…

愚かよのう

星霜の果てに住まいし異貌の神を祖とする余に…

猿の変り種に過ぎぬ人間が適うと思うたか

な、神だと…ッ

ふんッ余を討とうなぞ無知が過ぎるが

ズルズル

余興としては楽しめた

だが足りぬッ

何ッ!?

もう一時、余を楽しませよ

ギッ

あ

ギッ

ギッ

ぐ!?

汝の身をもってな…

ズリ

ずしゅ

ズ

ガ

んうッ!?

んぐ、ん、

ギリ

ギリ

ギリ

ギリ

ぐっんうッ!?

まずは漬め
我が神酒にて

ジュポ

ジュポ

ジュポ

んぐっ

ゴキュ

ゴキュ

ぐっ!?

その身に濯みし
穢れを払うが良い

何だ…コレは…酒…？
だが今まで口にした如何なるものとも違う
甘く…薫り高い…
信じられん
なんたる…
美味であろう？
ッあ！？
じゅるるる

がッ、あがッ
かはッ
げほっ
ごほッ
ドロ…
バカを言う！
さあ殺せ！
食らうが良いッ！
だが覚悟せよッ！
ハア
ハア
ハア
王の意地にかけて
貴様の臓腑を
食い千切り
地獄の苦しみを
与えてくれるッ！
勘違いするな
人の王よ
言ったはずだ
ズル
ズル
ズル
ズル
ズル
ギシ
ギシ

楽しませよと

!?

な、なにを
する！

美しい肢体を
持ちながら…

生まれを偽り
騎士王として
君臨する女…

くくくく
楽しみよのう

汝の蜜壷は如何な味わいか

……これまでか…

だが恥辱に塗れるくらいなら

せめて騎士として…

ぐ…

ズ…

ッあああ!?

ッあああああ!?

くはははッ無駄よ無駄ぁ

あ、あぁぁあああッ!!

我が洗礼を浴びたとあっては

おのが命とて自由に出来ると思うな

あ、がッ!?

ずる

ずる

ずぶん

ゼク

ゼク

ズズッ

ズズッ

ギチ

ギチ

だが先ほど意地があると申したな

よかろうその意地とやらに免じ自害を許そうではないか

だがそのように声をあげ

はしたなく涎を垂らし呆けた口を閉じねば

いつまで経とうと

舌なぞ噛み切れぬぞ騎士王よ？

許せない……

敗北と屈辱を受け入れている非力な自分が

ズッ

ズッ

ズッ

ひと突きごと身体がたかぶっていく自分が

あ

あんあ

ガク

ガク

ガク

ずぷ

ずぷっ

泣いてばかりではわからぬぞ騎士王よ？

ゴポ

は

ぶぴっ

あっ

ゴポ

ゴ

答えられぬのか騎士王よ？

なにより…

ビクッ

あ

あ

ビクッ

あ

ビクッ

あ

あ

ぶぴっ

ずぷ

ああ、それとも既に…

とうに捨てたはずなのに…

メスとしての喜びに意地も誇りも消えてしまうたか？

ッあああ！？

ごぽ

ごぽごぽ

少女のような泣き声を上げてしまう自分が

許せない…ッ！

ほう？この期に及んでまだ目が曇らぬとは

さすがというべきよの、騎士王よ

だが…

ひぐっ!?

ぎゅる

ぎゅるるる

ぎゅるるる

そして共に闘う兵も守るべき民もここにはおらぬ

やめ…ッ！触る…なぁッあぁッ！

あっ

裏からッかき、まわされ…てッ!?

そう、誰にはばかる事なく

だ…めッ！

おねがい…ッやめて…ッ！

心行くまで

ずにゅ

くにゅ

ズプズプ

ぐにゅ

ぶぢゅるるる

ぶちゅ

ぶぢゅ

ぐにゅ

ぐにゅ

ぶぢゅ

ぶぢゅ

ぶぢ

で、出ひゃ
出て、る、ッ！
出てるのに！
掻き…回されて！

ああぁぁッ
めくれ…ッ

めくれ…るぅ
ああッ！

また…入ってくる
…ぅぅッ！

また出ちゃぅ
ああ！

ふふふ
女陰を掻き抉られ
ながらの排泄、
如何かな？

悔しいか？
悲しいか？

何れでもなかろう
そう、今汝の心を
占めておるのは

ただただ快楽への欲求のみであろう？

ッんあああああ!?

ふふふ、コレだけ咥え込んでなお締まりが増す

よほど色に飢えておったか騎士王？

ひが、ひが、う…んっぶうう!?

くくく違うだと？

確かに…

破れんばかりに腹をかき回されておきながら

ぎゅぎゅぎゅ

ぎゅぎゅぎゅ

ぎゅぎゅぎゅ

ブタ…
そうメスブタよ
汝はもう
メスブタの王よ
違う違う
違うッ！
私はッ
わらひはぁッ
ふあッ
あッ
中で出てッ！
ドビュッ
びゅる
びゅる
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ

ひぁッ
ああッ！
や、やあッ
びくんっ！
ああ!?
あ…
びくん
ああ
ハァ
ハァ
びく びく
ハァ

後に王を救うべく国からやってきた騎士達が見たのは

王の変わり果てた姿だった

ただ無数に小さな魔物が絡み付いてはいたが

不思議な事に王の軍勢を壊滅させたという魔物の姿は無く

無事王を連れ帰る事が出来た

だが民と騎士達の混乱を恐れた魔術師が関係者の記憶を奪い、一切の記録を抹消

現在彼の王に関わる文献にそれらの痕跡が見つかる事は無い

次の日

セイバーって…タコのお母さん？

は？

夢オチ

RE03

RE03

琴月 一純

「セイバー、提案なんだが」

そろそろ皆自室に引き上げていてもおかしくないそんな時間。部屋に入ってきたセイバーを見るなりそう切り出した。

風呂上りなんだろうね。セイバーはまだ髪を結っていなかった。髪を下ろしたセイバーはとても可愛い。このセイバーを見て男だなんて思う奴居るのか？　ってくらい。

王様時代にもし髪を下ろす事があったとしたら、そこで絶対臣下の人たちにもバレてると思う。

「……提案ですか？」

なんでか、返事が来るまでに少し間があった。顔もどこか赤い……突然「提案がある」とか言われれば誤しがってもおかしくないか。

だが、戸惑いつつ小首を傾げるセイバーは反則的に愛らしかった。そんなセイバーを見られただけで今の提案には価値があったと確信する。

というかですね、もう我慢できないですよ？　ぶっちゃけた話こんな時間にセイバーが俺の部屋に来るって事は要するにセ――

「シ、シロウっ！　いきなり何を言うつもりですかっ!!」

怒られた。

…あれ。なんで俺の考えてた事が解ったんだろ。直感って奴？

「……違います。さっきから口に出ているだけです」

「おう…」

なんてこった。そんなベタな事をしていたとはね。気をつけようぜ？

「…あの、シロウ？」

「ん～なに？」

「もしかして酔っていますか？」

「いや、全然」

確かに酒は飲んだけどね。たまたま気が向いてセイバーが風呂に行ってる間にちょっとだけ飲んだ。お猪口で舐めるくらい飲んだだけじゃ流石に酔っ払ったりはしない。

だけどセイバーは疑わしそうに見つめていた。

「……」

思わず見つめ返す。

「――――――

だけだ。遠坂寝てたしね」
我ながら中々のスネークっぷりだったと自負できよう。でかいロボっぽいのをＲＰＧで破壊するくらいスネーク。
忍び込むのになんか関係あるのか？
「よく凛に気付かれずに……い、いえそうではなくて！
盗みの方が余計性質が悪いっ！」
「失礼な。ちょっと借りただけだよ？　…まぁ、遺憾ながらそこに本人の意思が介在してない事は認めるに吝かではないけど」
「とにかく、これは私が没収します。私から凛に返しておきますから、もうシロウは大人しく寝てください!!」
そう言って、俺の手から遠坂の制服を奪い取ると、セイバーは再び踵を返した。
「ちょっと待て」
俺も再びセイバーの肩を掴んで止める。
「……なんでしょうか？」
さっきとは違って、つーんとした表情で俺を見ている。
「いや、さっきセイバーはこう言ったよね『何でもしましょう』って」
「……ええ」
「こうも言ったよね『私が約束を破るとでも思いますか？』って」
「それは……確かに言いましたが…」
そう言ってセイバーは俯き俺から目を逸らした。
あ、なんだろコレ。なんかイケナイ快感に目覚めそうな予感。

今なら放課後の教室で、
『今センセイの事えっちな目で見ていたでしょう？』
『み、見てません！』
『う・そ。こんなにココを硬くしているじゃない』
『それは……』
『ふふ…可愛いのね。そんなに見たいのならお願いしてごらんなさい』
『え？』
『お願い。上手く出来たら見せて上げるわよ？』

とかなんとか言って、ショタっ子をいぢめる
『女教師　枝里子 23 歳～秘密の放課後～』↑ＡＶ
の気持ちがわかる気がするっ
抵抗できないだろうという立場をよく理解した上で追い詰める快感？
「ほ、ほ、ほら、そんな訳だからセイバー」
妄想でちょっぴり興奮しながらセイバーに詰め寄る。
「ぼ……」
「ぼ？」
「馬鹿者ですか――――――――っ!!」
怒られた。
「何が女教師ですか！　不埒な事を言っていると怒りますよ！」
またゑえていた事を口に出していたらしい。

「いや、もう怒ってるじゃないか。すっごく」
「つべこべ言わない！　どうしたというのですか!?　いくら酒に酔っているとはいえ、約束を盾にして無理に要求を通そうとするなんて貴方らしくない！」
「ん……」
そう言われれば確かにちょっと調子に乗りすぎたかも知れないが…
「だけどさ、セイバー」
「なんですか？　まだ制服を着ろと言うのなら、令呪を頂くことになりますよ」
うっわ。なんだか、セイバーの俺に向ける視線がかつて無いほどに冷たい。
今までこんな目をしたセイバーを見たことは無――ああ、ギルガメッシュを相手にしてる時はもっと酷かったな。
そう考えると凄いなアイツ。そんな扱いされてるのに感面も無く求婚なんてできる神経だけは尊敬できる面もあるかもしれない。
もしかしたら単に見下されて喜ぶ困った性癖があるだけかもしれないけど。
「突然黙り込んでどうしました？　用が無いのなら今度こそ私は行きますが」
三度部屋を出ようとするセイバーを呼び止めた。
「ごめん。どうしても見たかったんだよセイバーの制服姿が」
「……先ほどの妄想の下りも問題なのですが」
「可愛かったから」

「はい？」
「セイバーの困った顔が可愛かったからちょっと調子に乗った。すまない」
正直に言って大人しく頭を下げた。
酒にやられた（らしい）頭でも流石にここは真面目に謝らなきゃダメな場面だって事くらい解る。
「……はぁ……まぁ、良いでしょう。何を飲んだのかは知りませんが、変な酔い方をしているようですし…」
「えーっと……ああ、そうだイリヤと遠坂が『お土産』とか言って置いていった奴。あの二人で一体どこに行ったのかは知らないけどさ、土産だったら飲まなきゃ失礼だろ？」
「それですね。まったくあの二人は……」
え、なに？　もしかして一服盛られたとかそーいう話？
……思い返してみれば、二人ともどことなく楽しそうではあったなぁ。二人で出かけた先が楽しかったのかなーなんて思っていたが。
「まぁ、でも酔ってないし。別に何も変な事はなってないし。良いんじゃないのか？」
「今の自分の状態をおかしいと思わないのが充分おかしいのですが…」
呆れた様子で溜め息をつく。
ふと、思い出したように聞いてきた。
「――そういえば、どうして私に制服を着せようなんて思ったのですか？」
「それは…」
前に学校見学に行った時にそんな話が出て以来、ふとした拍子に想像していた。
「……もしもな、セイバーと一緒に学校行けたらなんて考えるとそれだけで楽しいんだ。もし一緒のクラスになれたらとか考えると嬉し過ぎる」
「……」
「それに、セイバーが学生になったら……なることができたらさ、もう本当に聖杯戦争も何も無い。完全無欠に平和そのものじゃないか」
そもそも、何かの偽装とかでもなく、本気でサーヴァントに制服を着せて〝学生〟にしようなんて馬鹿な考えなんだろうとは思う。
だけど許されたって良いだろう？
「今すぐ本当に転入するのは難しいだろうし、せめて制服でも着れば生徒気分は味わえるんじゃないかなーって」
「――」
セイバーは無言だった。ただ俺を見ている。
今更恥ずかしくなってきた。
「ま、後は単純。さっきも言ったけどさ、純粋に見たかったんだよ。制服を着たセイバーを。きっととてつもなく可愛いから」
誤魔化すようにそっぽを向いて言った。
というか、なんだろうね。普段だったらこんな事思っても直接口にしたりはしないんだけど。
やっぱり一服盛られたのかもしれない。
ただ、出た言葉は間違いなく本音だと言い切れるけど。
「……」
「……」
お互い、無言。
しばらくそうしていた後、セイバーから口を開いた。
「――そ、そんなに見たいですか？」
「え？」
「で、ですから制服です」
「そりゃ勿論」
一片の迷い無く頷いた。
セイバーはしばらく考える素振りを見せて、
「……解りました。少し待っていてください」
そう言い残して部屋を出て行く。
去り際、
「着るだけですからね」
と言い残して。
一人ぽつんと残される俺。
どうして制服を着てくれる気になったのかなんて事は聞かない。
ただ、何か通じたような気がして嬉しかった。
「……やべ、緊張してきた」

数分後。
コンコンと、ノックする音が聞こえた。
「どーぞ」
返事をすると、入り口に少しだけ隙間ができた。そこからセイバーの顔が覗いている。
不審だった。
「……なにしてんの？」
『あの、こういう服を着るのは初めてなので…』
「なので？」
『先程シロウは似合うような事を言っていましたが、やはりこういった装束は普段から着ている者が着ないと似合わないのではないでしょうか？』
なんだか余計な心配をしているようだった。
顔だけ出してちらちらと俺の様子を窺っている。
「いつかこんな事言った事あったよね」
「なんでしょう？」
『～是が非でもシロウには見立てていただきます』
「え？」
「あと、『金輪際、シロウの見立てた下着以外は身につけません!!』とも言ったね確か」
「あ、あれは……その、勢いといいますか……それに、下着と服では事情がちがいます……」
「いやいや。そうまで言ってくれたなら、大丈夫じゃないか。俺が似合うと思うんだからさ」
大体、『下着を見立てろ』って言う方が難易度高いのに。
「……わかりました……もしも似合ってなくても馬鹿にしたり、笑ったりしないで欲しい」
覚悟を決めるとセイバーは速かった。
返事をするよりも早くタンッと、軽やかな音を立てて引き戸が開かれる。
そこに、制服姿のセイバーが居た。
「――――」
言葉を失う。
開け放った戸から吹き込んだ風を孕んで、スカートが翻った。
遠坂の制服はセイバーには少し袖が長かったらしい。ちょこんと覗らしく出した両手でスカートを押さえていた
胸元の赤いリボンがセイバーの可憐さを際立たせている。
見慣れた制服なのに、どうしてこんなにも新鮮に見えるのか。
セイバーが着ているからと言われればそれまでなんだが、そのセイバーも普段とは違っている。
どういう心境からなのかは知らないが、セイバーは風呂に入る時に下ろした髪をまだ結っていなかった。
「――シロウ、聞いていますか？」
「――っ」
呼ばれて我に返る。
いつの間にか風は止んでいた。はらはらと翻っていた髪もスカートも元に戻っている。
「シロウ。そんなに見つめられると恥ずかしい…」
セイバーは頬を赤く染めて視線を逸らした。
言われてはじめて、ずっとセイバーに見惚れていた事を自覚する。
「……俺もなんだか、恥ずかしい」
「し、シロウが？」
「うんだって、俺の想像は全然適わなかったから。完敗」
俺がそう言うと、
「ということは、やはり似合っていないと？故に似合うと思った自分が恥ずかしいという事ですか…」
と、有り得ない事を言って俯いた。
どーしてこういう時だけ巡りが悪いのかね。はっきり言わなきゃ伝わらないか？
自分の反則さにあまりにも無自覚なセイバーにちょっと腹が立った。
「馬鹿」
「ば、馬鹿とはなんですか！」
「じゃあ、ばーか」
「言い方を変えただけではないですか!! 馬鹿にしたり、笑ったりしないで欲しいと言ったのに…」
「馬鹿にしてるのはそっちの方だ。セイバーが俺との約束を破ったりしないように、俺がセイバーとの約束を破ったりする訳なんか無いだろ」

「そ、それはそうですが……ですが今はっきりと馬鹿と！」
馬鹿にするってのは、相手に直接馬鹿って言うことじゃないと思うんだがな。
「ふん…」
しかし、何で気付かないかね。俺の視線を受けてりゃ見惚れていた事位普通気付くだろうに。
セイバーはまだ何か言っている。
いい加減うるさい。うるさいから黙らせる。
「聞いていますかシロ ―― んうっ……」
何も言えないように、唇を塞いだ。
胸を押されるが、力は弱い。
だから構わずにキスを続けた。
「んっ…ぁ……んぅ…」
「…んむ……ん……」
小さいセイバーの唇は驚くほど柔らかい。何度唇を交わしてもこの感触に慣れる事は無いような気がする。
「ぁ……っ…だ、めです…シロウ、だめ……」
弱々しくも拒むセイバー。
だが、聞く耳は持たない。
驚いて口を閉じられたりしないように、少し強く頭を押さえる。
呼吸のために開いた唇から舌を入れた。
「んっ!! ……し、シロウ……んっ！」
少し、抵抗が強くなった。
無視して綱んだ頭を上向かせると、セイバーの口内に差し込んだ舌を躍らせる。
「んぅっ！ ……ん、ふっ……んっ…！」
舌先がセイバーの舌に触れる。と、セイバーの舌は奥に逃げようとした。
「……セイバー……」
名を呼んだ瞬間、ビクッと肩が奮えたかと思うと、口内の熱が増した。
「セイバーも、舌を出して」
返事は無い。だが、セイバーの舌は逃げるのを止めた。
それだけで充分だ。セイバーの小さな舌を逃がさないように俺の舌を絡ませる。
「……ちゅぅ…ちゅる……ちゅっ……」
「んんぅ……んぅっ…はぁ、はっ……ちゅっ…」
俺が頭を押さえているせいでセイバーの口は開いたままになっている。
唇の端から唾液が垂れた。
セイバーはいやいやをするように首を振るが、俺は許さない。
一層口内への愛撫を強くする。執拗に舌をしゃぶり、すすり上げる。
やがて、おずおずとセイバーから舌を突き出してきた。
「ん……ちゅっ…ちゅぶ……はぁ……」
「ぁう……んっ……んぁ…ちゅるっ…」
お互い、舌を絡ませ合い刺激を与え合う。水っぽい音が部屋に響く。
溜まった唾液をセイバーに送り込んだ。
「……ん？ ……ン、ンぅ……」
少し驚いた表情を浮かべたが、喉を震わせ素直に嚥下していく。
絡めた舌を解き、口蓋に舌を這わす。
ちろちろと舐めると、セイバーの舌が俺の舌を追いかけてきた。
逃げるように、唇と歯の間に舌を入れる。
綺麗なセイバーの前歯をなぞっていく。
またセイバーの舌が追ってくるが、俺は舌を引っ込め頭を綱んでいた手を離すと、触れるだけのキスに戻した。
「……ん……ちゅっ…」
柔くセイバーの唇を食んでから、顔を離した。
「……シロウ」
俺を呼ぶセイバーの声はどこか拗ねるような響きが合った。
呼んだセイバー自身も気付いたんだろう。
「ち、違いますシロウ！これは……」
突然火がついたように真っ赤な顔になって慌て出した。
「そもそも！ な、何故いきなりこのような行為に」
がーっと赤い顔で捲くし立てるセイバーの手を取って俺の胸に当てる。
「し、シロウ？ 一体何を？」
「可愛い」
「え？」
「制服姿のセイバーも凄く可愛い。だから、見惚れてた」

「う、嘘です。先ほど似合っていないと――」
「言ってない。というか、似合っていないんだったらこんなにドキドキしたりしない。伝わってるだろ？」
胸に当てたセイバーの手に力がこもる。
「……ええ、まるで早鐘のようです」
「俺がこんなにもドキドキしてるのに、『馬鹿にした』なんてそれこそ馬鹿な事を言うセイバーに腹が立ったからキスした……謝らないからな俺は」
口に出して、今更猛烈に恥ずかしくなってきた。
赤い顔でセイバーから視線を逸らす。
「……すいませんシロウ。謝るのは私の方だ」
視線を戻すと、セイバーのまっすぐな視線に射止められた。
いつもこの視線に捕らえられると目を逸らせなくなる。
「先程、シロウが私に制服を着て欲しいと言った理由を聞いた時思ったのです。シロウは私をただの『女の子』として扱ってくれているんだと」
「……」
「私はサーヴァントです。例え今平和であっても戦いを捨てる事など出来ない。だが、平和な今であれば……一時の夢であれば一人の『女の子』として今この時だけ振舞う事を許して欲しいと……そう思いました」
だから、制服を着てくれる気になったんだな……
髪を結わなかったのもきっと同じ理由だ。
「それなのに、いざ制服を着てシロウの目の前に出たらシロウを疑ってしまった。こんならしくない格好をしている私を馬鹿にしているのではないかと。――思えばシロウは始めから私を『女の子』として扱ってくれていたのに――許して欲しい」
「ばか。許すも許さないもあるか」
手を伸ばし、セイバーの顔に触れる。耳に掛かった髪をそっと払う。
「……ん」
どちらからともなく、顔を寄せて再び唇を重ねた。
唇を割って舌を入れる。
今度はお互い求め合うように絡ませた。
肩を寄せ、より深く。
「ん……ちゅ……ちゅっ…えろ……ん、ふう……」
「んぅう……ちゅう……はっ……んく、んっ…ちゅっ…」
絡み合った唾液を分け合って飲み込んでいく。
吐き出される吐息は熱い。
もっとセイバーに触れたい。
そう思った瞬間、唇を合わせたまま布団の上に押し倒していた。
「―あ」
俺の下に組み敷かれながら、向けてくる視線に拒む色は無い。
「セイバー」
名を呼ぶ。
それだけで気持ちは伝わった。
「……制服、汚れてしまいますよ」
「大丈夫。またこっそり返しとくさ」
冗談めかして言うと、セイバーは笑った。
「……なんだ。ちょっと安心した」
「？」
ショーツを脱がすと、セイバーの秘所は蜜を溢れさせていた。
「いや、なんだかんだ言ってちゃんとキスで感じてくれてたんだなって」
「あ、あまり見ないで欲しいのですが」
「それは無理。こんなに綺麗なのに見るなって言われても」
そう言って、セイバーの股間に手を這わせた。
指先で秘唇を割る。
「ん。やっぱり綺麗だ」
「…そこを…あっ…褒められても、あまり嬉しくないのですが……」
「それはそうかもしれないけどな……」
そう言われても綺麗なものは綺麗だ。
開いたせいでこぼれた蜜が俺の指を濡らした。
顔を寄せる。
ゆっくりと割れ目に舌を押し当て
「――シロウ　な、なにを」
ようとした所で、気付いたセイバーが慌てて声を上げる。
「何って、セイバーのを舐めてあげようかなって」
「そ、そんな事しなくても良いです！」

閉じようとした太ももを押さえる。
「嫌だ。前にセイバーは俺のを舐めてくれただろ？　お返し」
何か言われる前にぐっと足を開かせると、今度こそセイバーの割れ目に舌を伸ばした。
「…あっ……ひゃっ！……んぅぅぅっ……」
甘酸っぱい匂いを吸い込みながら、セイバーの入り口の周りを舐めた。
まだ直接割れ目の中を刺激した訳でもないのに感じてしまうらしい。
その反応に気を良くして、入り口の周りを執拗に舐める。
「…んぅっ……んく……ふぅ……」
直接感じる部分ではない場所を攻められているせいだろう。時折もどかしげに腰が動く。
このまま焦らし続けてみたい気もしたが、もう俺が我慢できなかった。
「ん―……えろ……ちゅっ……」
指先でいっそう広く割り開きつつ、舌先を入れる。
剝き出しになった膣壁に舌を這わせながら、指先でクリトリスを探った。
「ちゅっ…ちゅる……じゅ、ずじゅ……」
音を立てて舐めしゃぶる。
指先がツンと尖る蕾を探り当てた。
びんっと軽く指先で弾く。
「あぁぁっ……し、シロウ……ひゃぅ……んぅぅっ！」
声のトーンが上がった。
反射的に足が閉じようとする。
「……セイバー足開いて」
「で、ですが、シロっ……んッ!!　……ひゃんっ」
クリトリスの皮を剝いて引っ掻くように弄っていく。
口内に入る量が増した蜜を時折嚥下しながら、舌での愛撫も続ける。
「ん……くちゅっ……れりゅ……」
「あ、あっ……んんぅぅ……い、いい……！」
閉じかけていた足からゆっくりと力が抜けていく。俺の舌と指で与えられる快感に時折腰を浮かせるようになっていた。
「はっ…んん！　…そんな、両方っ……だ…めですっ！　もっとゆっくりッ…んぅっ！」
「嫌だ。もっとする」
「……あぁっ…ど…して……意地悪」
もっとセイバーを鳴かせてみたい。
トロトロと蜜を流す膣口に舌を這わせる。舌でセイバーの膣口に刺激を与えながら、指でクリトリスを弄るのも忘れない。いっそう激しくセイバーの陰核を引っ掻いてやる。
「ふぁ、あああ！　……んぅぅっ!!」
「ンク、んっ……コク、コク……」
膣口に差し込んだ舌から伝ってくる蜜を飲む。
咽喉を鳴らして飲める程、今やセイバーの愛液は溢れていた。
「あ、いやっ！　…舌……舌が、私の……ひゃんっ…な、中に入って……だめっ！」
駄目と言いながらも、セイバーの膣は僅かに入った俺の舌を締めつけようとしてくる。
「ん。セイバー……おいしい……」
―もっと味わいたい。
そう思い、さんざん弄り回したせいでコリコリにしこり赤くなったクリトリスを強く押しつぶした。
「ひあぁっ！　あ、ああぁっ……!!」
一層声が跳ね上がった。
それと同時に、とぷりと溢れ出したセイバーの蜜を飲み干していく。
「だめ、だめですシロウ！　……あぅ…っ！　…そ、んなにしたらもう…」
「イッちゃう？」
俺がそう聞くと、真っ赤になった顔でコクコクと頷いた。
「じゃあ、イッちゃって良いよ」
折角だから、このままイクところを見せて欲しい。
指を膣内に侵入させると、すっかりとろけていたセイバーの内部は俺の指をあっさりと迎え入れた。熱い肉壁に締め付けられながら、セイバーの膣内を掻き回す。
「そ、んなっ！　……んぅぅっ！　…い、や……」
さっきまでのクンニでもうセイバーには何の余裕も無い。一気にイカせてやろうとクリトリスを刺激する。
「……い、やっ…いやですっ……いやっ」

だが、セイバーは頑なにイク事を拒否する。
「……実は気持ち良くないとか？」
これだけ感じていてそんな事は無いだろうが、俺にはそれくらいしか思いつかない。
「ちが……ちがいますっ…」
「じゃあ、どうして？」
「だって……んぅっ…」「緒にぃ……」「緒が良いですっ……」
「な――――――」
そんな可愛い事を言って俺の理性を完璧に破壊してくれた。
「あ　いや……だけどお前、自分は……」
言いかけて止めた。
きっと『殿方は良いのです』とか言うだけだろうし。
「――――解った」
弄っていた指を離す。膣内に差し込んでいた指を引き抜くと、ちゅぽっと粘着質な音がした。
セイバーに触れている間に、俺の股間も痛いほど膨れ上がっている。
股間の前を開け完全にいきり立った肉棒を取り出す。
「セイバー」
さっきまでの愛撫で大量の愛液を流すセイバーの割れ目に、自分のモノを押し当てる。
俺自身、さっきのセイバーの言葉を聞いてから、俺ももうセイバーと繋がる事しか考えられなかった。
「…あ、服を」
「行くぞ、セイバー」
何か呟いたが、聞こえない。
大きくセイバーの両足を開く。
そのまま腰を前進させ、ゆっくりと俺のモノをセイバーのなかに埋めていく。相変わらず狭いセイバーの中はきつく俺のモノを締め付けてくる。だが、トロトロに濡れたセイバーの中は普段よりも簡単に俺のものを受け入れた。
「ぁ……んんっ……」
セイバーの中はひどく熱かった。その熱でお互い溶け合って一つになったかのような錯覚。
「くっ…」
あまりの快感に声が漏れた。セイバーの膣内は肉棒の存在を確かめるかのようにギュッと締め付けてくる。
まだ入れたばかりなのに、このままじっとしているだけですぐに射精してしまいそうだ。
「セイバー」
名を呼びながら口を寄せる。
「あ…んん……」
二、三度唇を交わすと、俺はいきなり大きく腰を振り出した。
「ああっ……!!　んぅ!!　……くぁぁ……ひゃん…!!」
突如与えられた強烈な快感にセイバーは首を反らせて喘ぐ。
腰を突き入れる度にセイバーは嬌声を上げながら、きゅっきゅっと俺のものを締め付けてくる。
「あぅっ……ひゃん……あ、しろっ…シロウ、シロウっ…!!」
結っていない髪を振り乱しながら、セイバーは何度も俺の名前を呼んだ。
それが嬉しくて、夢中で腰を振る。
「ひゃっ、シロウ…!　おなか、熱くて……あっ…だめっ！」
セイバーの嬌声が響く。これだけ声を上げていると誰かに気付かれてしまうかもしれないが、今はもうそんな事はどうでも良かった。セイバーと一緒にイク事だけしかもう考えられない。
強烈に押し寄せてくる射精感を堪えながら、一心にセイバーの膣内を突き上げた。
「あっ、やっ、くぅぅんっ！　し、シロウ…もう、もう私は…」
さっきまでセイバーは絶頂直前まで感じていたんだ。長くは堪えられないだろう。
「あっ！　イヤっっ…だめっ…シロウ……あっ…お願いですっ……いっしょ、一緒に…」
「だ、いじょぶセイバー俺ももう」
限界が近いと告げると、箍が外れたようにセイバーは一気に階段を駆け上った。
「はい、はいっ……来る…いやっ、もう……あっ!!　いやぁっ、ああぁぁぁぁぁっっっっ　」
一際強烈にセイバーの膣が俺のモノを締め付けた。
それで俺の方も限界を迎える。貫くようなつもりで思いっきり腰を叩きつける。
ドビュッ！　ビュクッ……ビュク…ビュルルル…
二度、三度震えながらセイバーの一番深い所に全てを注ぎ込む。

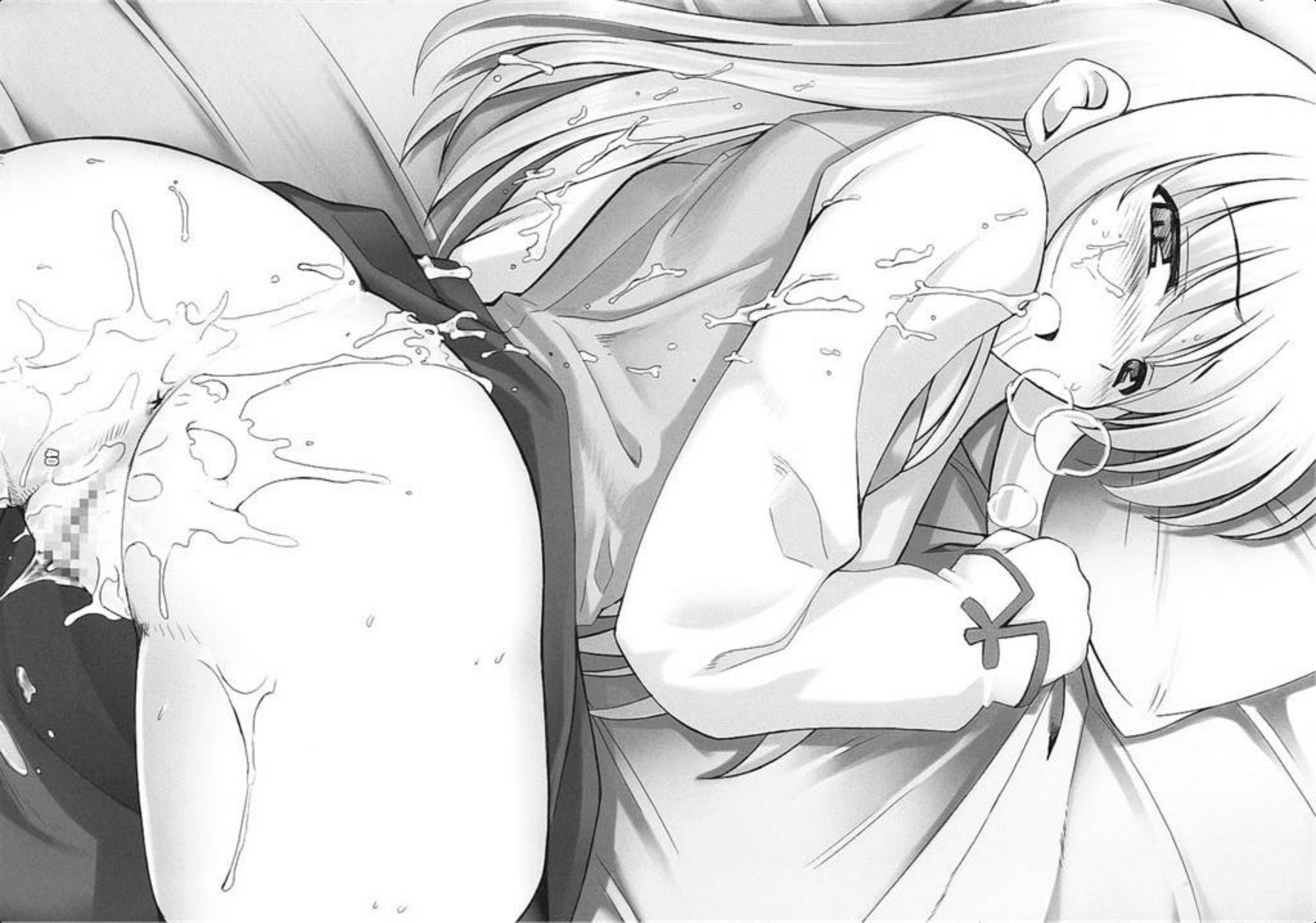
「…はぁ……ぁ……シロウの……膣内に…」
絶頂が止まらない。我ながら驚くほど大量の精液を吐き出した。
「……あ…こぼれてしまいます…」
狭いセイバーの膣内はすぐに一杯になり、繋がったまま精液が溢れ出してくる。
狭い膣内では飲みきれないのに、セイバーの膣内は精子を搾り取るように、きゅーっと俺のモノを締め付けてくる。
「…んぅ…熱い……溶けてしまいそうです……」
陶然と呟くセイバーを見て、強烈に愛しさが込み上げる。
と、同時に欲望もまだ収まらない。
すべて放出したにも関わらず、俺のモノはまだ衰える気配が無かった。
「……セイバー」
目を細めて余韻に浸っているセイバーに声を掛ける。
「……んぅ……はい？」
「ごめん。まだ足りないみたいだ」
「え？　……ぁ…」
そう言うと、俺の肉棒がまだ自分の膣内で固く屹立したままだという事に気付いたようだ。
「もう一回良いか？」
「……しかたないですね」
口ではそう言いながらも、満更でも無さそうな感じで自分から足を開いてくれた。
抜かないままで、再びピストンを開始する。

「あっ、やっ……あん！」
ぐちゃぐちゃと音を立て、俺の出した精液とセイバーの愛液が交じり合った。
腰を打ち付ける度にその混合液が零れ落ちてくる。
「ほら、セイバーこんなになってる」
手を伸ばし混ざり合った液を掬い取ってセイバーに見せた。
「舐めて」
目の前に伸ばすと、セイバーは素直に俺の指を口にする。
「…ちゅっ」
指先を這うセイバーの舌の感触が俺の興奮を煽った。
その光景を見て、
—もっと自分の証をセイバーの中に刻み付けたい—
そんな事を考えた。
「あ……っぅ……固く……あっ!!」
一段と固さを増した肉棒でセイバーの膣内を抉っていく。
「だめっ！　そんなに激しくしたらすぐに—」
構わず、ズン！っと深く貫いた。
「—っあぁぁぁ!!」
さっきイッたばかりの所にいきなり強烈な快感を叩きつけられたせいか、セイバーの膣内はびくびく痙攣を続けていた。
そのままの勢いでピストンの速度を上げる。
何回も何回も往復する度に、にちゃにちゃと音がするのがいやらしい。
既にセイバーは何度も体を痙攣させていた。

小さい絶頂はもう何度も迎えているのだろう。
だが、俺のものを締め付ける力はまるで手で握られているかのように強い。
いつも凛としたセイバーの顔が快感に溶けていく。
「やっ、やっ……だめですシロウ……ンンッ！　ンッ!!」
もっとその表情が見たい。
そう思い、より深く交わるためにセイバーの腰をぐっと掴んで引き寄せた。
カリのあたりまで引き抜くと、一気に腰を入れる。
「あああぁぁっ!!」
子宮口に先端が当たる感触。
それとともに、セイバーの声が跳ね上がった。
「あ、当たって、当たって…まずっ！　ひゃんっ！」
突き入れる度に子宮口に当たる感触が俺の快感も高めていく。
「あっ、シロウ……もう、ああぁっ!!　んぅぅっ!!」
「つく……セイバーまた膣内に」
「はい、出して！　ください……シロウ…の、んぅぅ！　精液……膣内に欲しいです……あぅっ！」
引きつるように痙攣するセイバーの膣内に深くペニスを突き入れた。
渾身の力で腰を振る。
「ひゃぅっ！　お腹が、痺れて……あ、あ、あ、あああっ！
だめっ！　もうっ!!」
セイバーの声が絶頂に駆け上がっていく。

「シロウ、シロウ……来る…イクっ、もっ、イっちゃ……あぁっ!!　い、イクっ！イクっ!!　あああああっっ――――!!」
セイバーは絶頂の声を上げながら、体を逃らしていく。
俺は子宮口に押し当てたまま二度目の精を解き放った。
ドクっ！　ドクドクっ！　ビュルッ！　ビュルルルッッ!!
「あぁっ……あ、あ……熱いのが……お腹に…」
セイバーの子宮の中に精液を吐き出していく。
ガクガクと腰が震えるが、セイバーの腰を強く掴んで押し付けて射精を続けた。
「あうっ、あ、あ、あ……んっ……んんっ…」
セイバーは絶頂の余韻を感じながら、俺の吐き出す精液を受け入れていく。二度目とは思えないほどの量をセイバーの膣内に流し込む。
ビュク！　……ビュクッ！　……!!
最後の一滴まで注ぎ込むと、セイバーの膣内からペニスを引き抜いた。
その途端、ごぼりと音がしそうな程の量の精液がセイバーの割れ目から溢れ出る。
「んっ……垂れて…」
無意識なんだろう。
股間に手を伸ばしたセイバーは溢れてくる精液をにちゃにちゃと掻き回していた。
うっとりとした顔で、白濁した精液を流し続ける自分の股間を弄りっている。
いつものセイバーとのあまりのギャップに目を離すことが出来ないでいると、
「…ん……んぅ……れろ」
掬い取った精液をおもむろに口に運んで嚥下した。
「ん…おいしい」
「――――」
ドクン――
二回にわたってあれほど吐き出したにも関わらず、俺のモノはまたも固さを取り戻していた。
いくらなんでも、回復の早さに自分でも不安になるが、こうなってしまえばもう考える事は一つしかない。
またセイバーと交わりたい。
「……セイバー」
「？」
まだ意識がはっきりしていないのだろう。目の焦点が合っていない。
「セイバー後ろ向いて、お尻を上げて」
だが、セイバーは俺に言われるまま、後ろ向きになりお尻を突き出した。
こうすると、二回も中に出されたせいでどろどろになったセイバーの割れ目がはっきりと見える。
その上にはセイバーの可愛らしいアナルが見えた。
ちょっとした悪戯心が沸いて、指先でそこを刺激してみる。
「あっ…んっ……」
僅かだが、確かに反応があった。
それに気分を良くしてこしょこしょと触る。
「……ん、あっ……あっ…」
ちょっとの刺激で敏感に声を上げるセイバー。
それが楽しくてアナルを刺激していると、セイバーがはっきりと意識を取り戻した。
「あっ……あっ…ん……ん…しろう？　……あ、えっ？どうしてこんな…」
それと同時に俺はセイバーの膣内にペニスを突き入れていた。
「え？　ひゃうっ!!　し、シロウ？」
「ごめん。セイバーまだ足りない」
「……」
「でも、セイバーが嫌ならもうこれ以上はしない。我慢する」
見上げてくるセイバーの瞳をじっと見つめてそう言った。
いきなり入れておいてなんだが、これは本気だった。
俺はセイバーを無理矢理犯したいんじゃない。
……本当だぜ？
「……そうは言ってもシロウのモノはまだカチカチですよ」
「…我慢する」
やせ我慢だった。
黙ってセイバーを見つめる。
「ん……んっ……」
と、ペニスに柔らかい刺激を感じる。
「…？」

小さくセイバーが腰を動かしていた。
「あっ……あ…うっ…」
ゆっくりと、膣肉で俺のモノを撫でるかのように腰を回す。
「せ、セイバー？」
「ん……あっ……大丈夫です、シロウ……私もまだ」
セイバーは肩で息をしながらも、健気に俺のモノを刺激してくる。
それで完全にやられた。
精神的な充足感で射精感も一気に高まってくる。
「――行くよ」
「はい。どうぞシロウ、来てください」
どうせ長くは持たない。
そう思い最初から勢いよく腰を振った。
俺の下腹部とセイバーのお尻が打ち合ってぱんぱんと卑猥な音を立てる。ペニスに引っ張られてめくれるセイバーの襞が見えた。
「あっ！　……はっ！　…あぁっ、すごい……さっきよりも……奥まで……ひぅっ！」
腰を引くとセイバーの膣内が吸盤のように俺のモノに吸い付いてくる。立て続けに二回も出して敏感になっているペニスにその刺激はたまらない。このままだと俺一人勝手にイッて終ってしまいそうだ。
「くっ…セイバーッ」
「あ、ひゃっ、んぅ……ふぁ……深い……んぅぅ…！」
大きく動かすのをやめ、短いストロークで深い所を刺激する。
時折円運動を加えたりしながら責め続ける。
「やっ、それ……奥……こすれて……ああぁっ!!　あっ！ひゃっ!!」
鼻にかかったような声が俺の部屋に響く。
「あぁっ!!　……ん、んん……いい、きもちいい……くぅぅんっ!!　はぁ、はっ……んっ！　あ…」
ぬるぬるとしてるクセに、セイバーの膣内は俺のペニスをしっかりと握るように締め付けてくる。しかも、セイバー自身も快感を得ようとお尻を振ってくるので、ますます俺の方には余裕が無い。
もう何往復もしないうちに射精してしまうだろうと確信する。
「ああっ、シロウ、シロウ……いつでも、好きな時に…」
そういうセイバーの声にも余裕は無い。
自分も快感に震えているクセに、そんな事を言うセイバーを見て逆に意地になった。
絶対一緒にイカせてやる。
セイバーの腰をしっかりと掴んで、より深い所を狙って突き入れた。
突き入れたペニスを奥で回し小刻みに突く。何度か繰り返した後引き抜いて入り口の周りをくちゅくちゅと刺激してやり、また深く突き入れる。
「あ、ひゃぁ!!　あ、あ、あぁぁぁ!!」
交わっている部分から、白濁した液体が押し出されこぼれ落ちる。ポタポタと俺の布団にシミが広がっていく。
「くぅっ！　ああ、あああぁぁっ!!　いやっ、っくぅ……あ、イク……イってしまいますっ!!」
よがるセイバーの声にも、もう何の余裕も無かった。
俺も一心にセイバーを責め上げる。
「んっ……ふぅっ…ああぁ！　だめ、もうだめっ！　あっ…んくぅぅっ!!」
もう技巧も何も無い。ただ深く求めるために、激しくセイバーの膣内に俺のペニスを突き入れる。
ちかちかと目の前が明滅する。もう俺も限界だ。
「セイバーっ！」
「あ、あ、あああぁっっ!!　頭が白く……白くなって……イクっ！　……んうぅぅっ……あんっ、やっ、も、もうっ！」
激しく嬌声を上げながら、セイバーの背中が反り上がって行く。
その光景を見ながら俺は決壊した。
精液を放ちながら突き入れる。
「シロウっ、シロウっ!!　ぁ、あああっ、あ、あ、あ…やっ、やぁぁぁ!!　ん…んっ……ひゃぅぅぅぅぅっっ!!」
「――セ、イバっ!!」
「あああぁぁ!!」
がくんと、力が抜けてセイバーが前のめりに崩れた。
その弾みでセイバーの膣内からペニスが抜ける。
セイバーのお尻の割れ目に擦りつけながら射精を続ける。
俺の吐き出した精液が背中や髪に降り注いだ。
「はぁ……ふぁ……ん、んんぅ…」
ぐったりと崩れ伏したままで、俺の精液を受け止める。



びくびくと絶頂の波に打たれ下半身を痙攣させていた。
「ん……ん……ふぅ……んんっ！」
一つ大きく震え、ようやく絶頂の波から解放されたセイバーが、こてんと御向けに転がった。
「シロウ……」
「ん？」
顔を寄せると唇を塞がれた。
セイバーの髪を撫でながら、しばらくそのまま唇を重ね続けた。

「折角風呂上りだったのに、また風呂入りなおしだな」
「そうですね……一緒に入りますか？」
「魅力的だけどな、また襲いそうな気がする」
笑われた。
恥ずかしくなって、部屋の様子に視線を向ける。
「……しかし我ながら、よくこんなに出したもんだ」
布団は精液やらなんやらでぐちゃぐちゃになっているし。
「ふふ……いくらサーヴァントとはいえ、こんなにされては妊娠してしまいそうな気がしますね」
「あー……」
――受肉しているんだからあながち可能性が無い訳でもないんじゃないか？もし子供が出来たらどうしようセイバーの子供だったらきっと可愛いに違いない――
唸唸にそんな事が頭の中を駆け巡り、
気が付くと口を開いていた。
「…名前」
「はい？」
「名前を考えておかないとな」
そう言う俺に少し驚いた顔をしたが。
「――――そうですね」
答えたセイバーは確かに微笑んでいた。
今こうしてここにいられる事がそもそも夢のようなものだ。
このままいつまでも続くかのように見えても、本当は儚く消える泡沫の夢。
お互いそんな事は解ってる。
だけど、有り得ないと笑い飛ばして終らしてしまうにはその末来図は素敵過ぎるだろう？
先程までの父わりが嘘のように穏やかに語り合う。
たとえ覚めてしまう夢だとしても、交わした想いだけは現実だ。
「……何考えてるんだか」
気恥ずかしくなり、温厚化するように勢い良く立ち上がる。
「風呂行こうか」
「はい。……腰わないでくださいね？」
「努力する」
益体の無い言葉を交わしながら、セイバーの手をとり部屋を出た。
願わくは何時までもこんな時間が続きますように――

了

■あとがき■

最後までお付き合い頂きありがとうございます。
いつも以上に早く動きだしたつもりだったのですが、いつも以上にハードな原稿でした（苦笑
それでも現在締切当日の朝ですが、印刷所様へ電話かけて頭下げたり精神的にどうしようもなくなる、
というとこまでいかない辺りは、まだ余裕があると言う事なのでしょうか。

や、そんなわきゃ無いか（汗

せめて7月中にきちんと入稿できるようにしないと
偉そうな事は何も言えそうにありません（苦笑

今回も好き勝手描けて楽しかったんですが、描いてる最中から色々反省しっぱなしでした。
触手出して絡ませればエロいってもんじゃないっすね。
いっそ次は触手出さないとか…。
でもそれはそれでもの足りなくなりそうな…。
まぁ何にせよ次もFate本だと思います（笑

発売時期次第ではスパロボ06本になるかもしれませんが、エロには変わりありません（苦笑
ただ仕事でもエロい漫画描かせてもらってるんで、冬コミではもう一冊、
ギャグかイラスト本でも出してみたいもんです。
ああ、あと、なのは本ッ！
元々あと一冊は描きたいと思ってましたけど、
色々アニメの企画も動いてるようなんで
それに合わせて本作って行きたいと思ってます。
……と言うことは来年か…先長いですけどまったりお待ち下さい（汗

っとここまで書いてもまだ半分埋まらないあとがき…。
原稿描いてる最中はアレコレ書きたい事浮かんでくるんですが、
徹夜明け締切当日じゃロクな事が浮かびません。
もう次回からは一番最初にあとがき書こう。

ごめんなさい、ほんともう無理、書く事が浮かばないのでこの辺で（汗
ああ、最後に取って付けたように毎度原稿を手伝ってくれるDenim氏、
ラブな小説を書いてくれた琴月一純氏に感謝。

それではまたー。

無望菜志

■奥付■
「RE03」

発行　：RUBBISH選別隊
発行日：13/08/2006
印刷　：プリンティングイン株式会社
連絡先：rss@crest.ocn.ne.jp
URL：http://www3.ocn.ne.jp/~rss/

For Adult Only

RE03

presented by RUBBISH Selecting Squad